

鬼と光のイメージの中で

——Schizoid Character の少女との接触を通して——

京都大学教育学部 博士課程一回生 藤 紺 真理子

陸奥の安達が原の黒塚に
鬼籠れりと言ふはまことか

平
筆
墨
盤

はじめに

彼女の示すイメージの中にはじめて“鬼”を感じたのは、彼女が「顔がうす黒かったり黄や青だったりして、体のまわりに何か白いものがうき立っているたくさんの人があみえる」と語った時だった。

はじめてむかいかつて座った2人きりの部屋で、彼女はマンガを持ち、見るともなくパラパラとめぐりながら、全く変化のない表情で黙っていた。口からはブツブツと何やらささやかれ、治療者はそれは、彼女がマンガの下にかかるべージの数字を読んでいるにすぎないようになっていた。そしてそんな彼女は、全くとりつくしまもないようになってしまった。治療者から日常生活のことなどを問い合わせると、一瞬生き生きとした微笑を見せるのが、答えるか答えないかのうちにその表情はかき消すように失なわれ、治療者はまるで彼女がどこか遠くに風に吹かれて連れ去られてゆくかのような寂寥感に襲われた。そしてあの生き生きとした一瞬をよび戻す次の問を必死で搜さねばならないような気持ちはかられるのだった。しかし、その場の窮屈さを伝えることはや「どんな感じ? どんな気持なの?」と聞くことに対しは全く(とその時の治療者には感じられた)反応が得られなかった。ただ彼女は「私…真っ白なの…」と自らを語った。1時間の面接の後、治療者は何故か言い知れぬ疲労感に襲われた。それは決して埋めることのできない大きな空虚な穴を必死で埋めようとした後のようないい感じであった。しかし何度か見せてくれた知性をひめた笑顔を治療者は、その時は感情がこもっているように感じた。しかし「きれいだな」と思ったことも事実であった。この後者を変えにして、治療者はこの少女と会ってゆく決心をしたわけである。その時彼女は高校1年であった。(医師の診断は“急性分裂病の後遺症としての離人感を主症状とする分裂性性格(Schizoid-Character)”である)発症から2年程経過しており、急性期の1年間は部屋に閉じ

こもってしまって留年している。現在学校へは順調に登校していて成績は良い。
対話によるコミュニケーションがほとんど不可能であったことから、面接室で油絵を描いてゆくことを提案した。幸い治療者は油絵の経験があったので、技術的なことも指導することができた。次第に対話の時間が増え、現在ではほとんどの対話で終る時もあるが、イーゼルに描きかけのキャンバスをたてかけ、彼女がそれに向って座って、治療者がその斜め後ろに座るという設定は変わらない。

境界例あるいは分裂病園内のクライエントと会つてゆくためには、理論的・技術的なバックグラウンドを持つことはもともとより治療者自身の内的世界の探求の必要性は強調してされすぎることはない。正式に個人分析を受けすることが最も望ましいことかもしれないが、それは現状では誰にでも機会が与えられるものではない。その時治療者自身に自分の内界の探究の必要性を思し知らせるのはクライエントである。そして治療者はクライエントと面接を続けてゆく必要性に迫られて、自分自身泥まみれになり、自分の持っているものを、興味も無意識的イメージも含めて総員せざるをえなくなる。しかも、治療者であるためには、それらを統合していかなければならぬ。今回は、治療者自身の中でクライエントの像をイメージとして再構成してゆく作業を、クライエント理解への1つの道として(唯一といつてはいけない)記述してみたい。すなわち、本事例が継続中のものであるとともにあって、治療経験を追って述べるという手続はあえてとらず、治療者にとって全く新しい体験と感じられた彼女の内的世界に分け入ってゆくための試行錯誤そのものを述べることにしたい。それはある意味で治療から離れたものであるかもしない。しかし、彼女のような、治療者の日常経験の延長では全く推し測れない内界を持つクライエントに近づき、その内界を理解するためにには治療者にとっては不可欠の試行錯誤の1つであるようにも思われる。

ントが示してくれたイメージとのからみあいから、ある内的世界を描き出してみたいというのが本論文の目的である。

I. 鬼 の 章

(1) 膜血の闇

治療者とともに画集をめくり、ほとんどどことばなく絵を見ていた彼女は、ふとキリストが十字架から下される情景を描いた絵を指すと「これ、血出でないね、くさが打ってあるのに血が出てない」(4回)と述べ、「テレビで(キリストが十字架にかけられる場面)も血が出てなかつたの」と言うと、またこともなげに次の絵にうつるのであった。

彼女は文鳥を飼っている。唯一の友とも言うべきこの鳥は、以前番だったが、「1羽は卵の産みすぎか、おなかがパンパンになつて死んで」(8回)今は1羽であり、しかしおを産むという(どちらかが離かわからぬ話だが)。もちろん1羽だけだから卵は離らない。「そのうちが」、その卵腐つて臭うなつてくるの。そしたら、その卵、棄てるの」(11回)とモノトーンで語った。治療者の「かわいそいそ」などといふことは、彼女の表情には何の変化もよびおこさない。

また、読書の好きな彼女が要約してくれた彼女の好きな話は次のようなものだった。「子供2人が船底にかくられてしまつたまま出航したんだけど、その船で暴動がおこつて、子供たちは船員2人と仲間になつて他の暴動者をみんな殺したの。漂流しているとある時、向うから船が来るので助けを求める、その船も漂流船で、船長はその甲板に立つたまま死んでいて、内臓はカラスに喰いちぎられ、その船長の向うから、カラスがあばら骨の間に頭を突き出したの。仕方ないからそらそのままで漂流しているうちに食べるものがなくなつて、子供の1人が死んだので、あとの3人でその肉を食べるの。しばらくして、今度はくじで負けた者を食べることになつて、船員1人が殺されて食べられてしまうの。やがてある島に流れついて、2人はそこの土人といつしょに冒険をつづけていくの」(10回)。決してこの小説は怪奇小説などではなく、むしろ最後の冒險の部分こそが小説の内容なのだが、彼女は上のようなことをその要約として語つてくれたのである。そして言うまでもないが、表情は全く変らず、口元には微笑みさえ浮べて語るのであった。

治療者のイメージの中では、これらのことと無表情に語る彼女の姿が、ある女のイメージと重なつて感じられる。それが治療者に、彼女の内界をより鮮明にしてくれるようになつた。

旅の衣は縫縫の…へはじまる能「黒塚(安達が

原)」をここでひきあいに出すことを許してほしい。この能は、ある僧が旅の途中、陸奥の安達が原になつてしまい、ある小屋に一夜の宿を求めるところからはじまる。山奥にひとりかくれ住むその小屋の女主人は糸を繰りながら己が身のはかなさを語るが、僧はまことにとてもな教訓を述べる。女主人はそれに応えず、美しい断片的なことばで都の春を歌いあげるのである。そして夜、女主人は秋の夜寒をしのぐために山にタキギをとりに出かける。その時、女主人は自分の罰を決してのぞき見ななどきつく言い残してゆくのだが、僧はその約束を、抑えがたい衝動から破つて、ついに闇をのぞき見るのである。その闇は「膜血たちまち崩れし、昊穉は満ちて膨張し、膚膩ことごとく崩壊せり。人の死骸は数知らず、軒と等しく積み置きたり。」あまりのおぞろしさにその小屋を逃げ出する僧。闇を見られた恥ずかしさに鬼と変化して追つてきた女主人はしかし、僧の説教に消え去るのである。

筋は語り古された“禁忌を破るテーマ”である。しかし鬼に変化する話としてはその動機は能には珍しく、膜血の死骸が累々とした闇を見られた“羞恥心”からなのである。この能は、そのまま死骸を集めめる獵奇的な女を描いているのではないか。この闇とは、すなわち、女主人の中なのである。そして、軒に達するほどに積み上げられた死骸とは、まさに女主人の過去において傷つけをして傷つけられ、おこしめられてきた傷跡の数々なのである。

しかも毎晩その死骸と共に長い夜をただひとり糸を繰り、糸繰り歌をうたしながら過ごす彼女は、僧がその闇をのぞきさえしなければ鬼と化せずに済んだのであって、はじめから僧を取つて喰おうと女に化けているのではなく、巨大な空洞がボックリと女主人の心の中にあつてゐる。女主人がそのことをばを受け入れないので、その戸はまだ開いてはならないといふのである。

また、これらの死骸は、その女主人の“傷”であると同時に、山奥に人界を捨てた女主人が、からうじて過去にあつたであろう現実の存在との関係を再現できうるものもある。「昨日も空しく暮れねれば…」といふ諺換には、今日もまた空しく暮れるであろうし、明日にも未来もまた一気に鬼と決つて鬼界へと落としやつたのである。鬼と變化して僧を追う女主人は、なおも傷つけてやまぬ人界への深い情りと悲しみでうちひしがれており、だからこそ僧の説教で消え去つたのである。そこには鬼の怒りと仏法の力の闘いといつたものは見られない。この経は女主人にとっては罪をつくつてやまぬ人界のたちへのたむけであったのではないだろうか。

彼女(クライエント)もまた傷つきやすいためを持つていた。特に周囲の敵意、圧迫に対してはほとんどの他敏感であり、彼女自身もまた周囲を忌み嫌っていたといえる。

しかし周囲への自らの敵意に気付くのは後になつてから

化してしまうなど自分が身に人間的な暖かさをよびおこしてくれるのであろう。

女主人がやっと現実とつながりをもち、現在の生をともにとよると述べたのは、この死骸、傷をくり返しなで返すことによるところでは、傷つけ傷つけられにせよ、女主人が現実とコミュニケーションを持ったあかしがその死骸であると思うからである。すなわち、そのような無残な死骸のみが女主人の“生”(生きてきたこと)を保証するものなのであり、人界に生をうけた我身を保証するものなのである。それを思うと、「そんな死骸など捨ててしまえ、そうすれば人界に戻れるだらうから」などとは決していえるものではない。

さて黒塚の女主人によせて彼女(クライエント)の内界をさぐつてみたわけだが、ここでこそし、黒塚の女主人と彼女のちがいにも見をむけてみよう。その1つは、黒塚の女主人が、膜血の闇を人からくそうとしていたのに対し、彼女がそれを治療者に自ら語つたところにある。治疗者が旅の僧のようにのっけから教訓じみたことを言わずに、彼女の全体を莫然と包んでいることによって、彼女は自らの膜血の闇を次第次第にその戸を開けて見せ、心の傷の深さを示したのである。絵や鳥や物語にたずねて、そのような血と死のイメージの満ち満ちた世界のものたちである。そのときの女主人にとっては人界のものたちそこ鬼に見えたのではないか。おそらく女主人のもつ傷つきやすさが、人界の中に潜む鬼を見出しやすかっせいいもあるだろう。そして無残な傷を心にも見た女主人は同時に、自分もまた人界に生まれた鬼であることを、自分もまた人の心に傷をつけていることにも敏感に気付いているのである。だからこそ人界への情念をかかえまたまま陸奥にかくれ住んでいたのである。にもかかわらず、その上にまだ女主人の傷を憎やそうとするもやすかっせいいもあるだろう。

そこには、黒塚の女主人が死骸の闇を戸一枚へだてたところで、はかなく美しい都の春の歌をうたつたように、彼女はそのことにようつては全く表情を変えずに、また、治療者からその痛まさしさへの応答は全く聴きいれる様子を深く入りこんでしまつて自分の内界をかいまみせてくれたのではないか。この闇とは、すなわち、女主人の心の中なのである。そして、軒に達するほどに積み上げられた死骸とは、まさに女主人の過去において傷つけられて傷つけられ、おこしめられてきた傷跡の数々なのである。

しかし毎晩その死骸と共に長い夜をただひとり糸を繰り、糸繰り歌をうたしながら過ごす彼女は、僧がその闇をのぞきさえしなければ鬼と化せずに済んだのであって、はじめから僧を取つて喰おうと女に化けているのではなく、巨大な空洞がボックリと女主人の心の中にあつてゐる。女主人がそのことをばを受け入れないので、その戸はまだ開いてはならないといふのである。

また、この文鳥が彼女にとつて心をを許せる唯一の友として、この文鳥が彼女が彼女の好きなE・A・バーであり、この小説の作者が彼女の好きなE・A・バーであることを考えると、無表情で何らコミュニケーションを禁じていないかのようには思えない。女主人は僧のことは耳をかさず、コミュニケーションを絶ち、ただ美しく甘い偽りの都の風情をことばのままに夢幻の中にうたう。その方がほのかにでも、今にも鬼と

ここには確かに、揺れ動く心を認知した経験があるのではないかと思われた。これらをモノトーンで語ることが、このような死や血という原初的で社絶ないイメージの世界にまで及んでしまう感覺の鏡敵とそれに対する同時に無感覺でいうとをしていることを、そしてこれらを語ることそれ自体が、全く無感覺ではない感情の動搖を示しているのではないだろうか。治療者としては、そこそこも受けてとめてゆく必要があるのだろうが、しきどれをも受けとめてゆく必要があるのだろうが、しかし現在のところでかろうじて接近できるのは、語つてくし現ること含まれているその感情の懼だけである。そこに焦点をあてながら、現実にできることは、無表情のときはそれ以上深入りしようとせず待つことだけである

(2) 誰が女主人を鬼にしたのか

再び黒塚の女主人に話を戻し、黒塚の女主人の間にうず高く積みあがれた死骸をもう一度考えてみよう。これだけの無残な傷を女主人はどこで受けたのだろうか。それはいまでもなく人界においてである。女主人は人界に生をうけたのであり、はじめから鬼であったのではない。その女主人の心に次々と無残な傷を積み重ねていったのは人界のものたちである。そのときの女主人にとっては人界のものたちそこ鬼に見えたのではないか。おそらく女主人のもつ傷つきやすさが、人界の中に潜む鬼を見出しやすかっせいいもあるだろう。そして無残な傷を心にも見た女主人は同時に、自分もまた人界に生まれた鬼であることを、自分もまた人の心に傷をつけていることにも敏感に気付いているのである。だからこそ人界への情念をかかえまたまま陸奥にかくれ住んでいたのである。にもかかわらず、その上にまだ女主人の傷を憎やそうとするもやすかっせいいもあるだろう。

そこには、黒塚の女主人が死骸の闇を戸一枚へだてたところで、はかなく美しい都の春の歌をうたつたように、彼女はそのことにようつては全く表情を変えずに、また、治療者からその痛まさしさへの応答は全く聴きいれる様子を深く入りこんでしまつて自分の内界をかいまみせてくれたのではないか。この闇とは、すなわち、女主人の心の中なのである。そして、軒に達するほどに積み上げられた死骸とは、まさに女主人の過去において傷つけられて傷つけられ、おこしめられてきた傷跡の数々なのである。

しかし毎晩その死骸と共に長い夜をただひとり糸を繰り、糸繰り歌をうたながら過ごす彼女は、僧がその闇をのぞきさえしなければ鬼と化せずに済んだのであって、はじめから僧を取つて喰おうと女に化けているのではなく、巨大な空洞がボックリと女主人の心の中にあつてゐる。女主人がそのことをばを受け入れないので、その戸はまだ開いてはならないといふのである。

また、この文鳥が彼女にとつて心をを許せる唯一の友として、この文鳥が彼女が彼女の好きなE・A・バーであり、この小説の作者が彼女の好きなE・A・バーであることを考えると、無表情で何らコミュニケーションを禁じていないかのようには思えない。女主人は僧のことは耳をかさず、コミュニケーションを絶ち、ただ美しく甘い偽りの都の風情をことばのままに夢幻の中にうたう。その方がほのかにでも、今にも鬼と

隠りの微笑みにかくされた悔薙と懲罰さに彼女は敏感だった。彼女を見る他人の、そして身近な人たちの目の色の変化に彼女は敏感だった。人が無意識にふりまいる体臭にも似たその人の習慣的な行為の1つ1つが彼女には嫌悪感をよびおこし、彼女の傷をふやす原因となつた。人が自らつくりあげたカラに閉じこもつてしまふ姿に彼女は敏感だった。(これらは彼女の書いた小説『冷子』に、その主人公冷子の動きとしてみてごとにあらわされている。) 彼女には、人は、傲慢さと彼女の悔薙を持った意地の悪い対象として写ったのであった。人の集団(人界)は彼女に、「その後姿はゾソゾと氣味に動いていて、ふりむいたその顔はうす黒かつたり、黄や青だつたりして、体のまわりに何か白いもののがうきたつて夫に急迫したその瞬間、忘れていた夫への愛がつづけられないのである。しかしそれは傷つかなくなつた」(28回)と言っている。しかしそれは傷つかなくなつたわけではない。闇にかくされた死骸はおそらく度は彼女も気づかぬうちにさらに重ねられていたのではないか。

さて黒嫁の女主と彼女(クライエント)のちがいの2つめは黒嫁の女主の闇は憎の嗜好心によって露わにされたが、彼女の體血の闇—憎惡怒りの内面—は彼女の「意に反して口から出てしまう」ことにみられる。「自分は漠然としか考えていないのに、気付くとそれをブツツと言っている」(28回)「そしてみんなが自分の心中を知っている」(28回)。彼女は闇の戸戸を閉めておくだけの強さも持たないのである。彼女がいかに無感覺を装おうとしても、他人は彼女の闇の中をかいま見てしまうのである。彼女は黒嫁の女主よりもさらに鬼と化しかねない紙一重のところを生きているようにならなかつたのだ。しかしそれらの死骸は彼女の意に反して、直接外界にその姿を露わにしているために、彼女はまさに「感じないと思っているもの」によっておびやかされているのである。それは、人の惡意を感じやすい心によるのであり、またその惡意は外界に写し出(投射)された己の憎惡といふことができるであろう。彼女が「感じない」と主張するが—彼女は友達がないこと

クスを動かすエネルギー源を見出さ以前に、それにふたをしうとも、またそれを捨てろともいえるものではない。

しかし、そのように自分が「真っ白」で、中に何もないう、「色をつけてもすぐに元のまっ白にもどつてしまふ」ということでもまた彼女を苦しめはじめていた。ここに自分をみつめるもう1つの目を感じたがゆくのである。それは彼女の苦しみを倍加させる。「私には感情がないみたい、そんな私に誰が感情を話してなどくれるものか。私は人より優れていると思いたい。だから自分が壓迫されるとパッと気がつくの。」(21回)「時々、何の理由もなくおなかの底から怒りがボコッボコッとふき出してくれるの」(23回)「人が真剣でないのを、ぱっと、すぐに悪口やののしりが口から出そうになるの。人を傷つけることばが口からとび出しそう」(25回)

自分が鬼界に住む者なのではないかと感じることが、なおさら彼女を人界に執着させるのである。その間で彼女は擺れ動いている。自分の内にこそ鬼がいるのだろうことを認める彼女を受け容れ、しかもなお彼女を鬼界へ押しやらないために、治療者はいったいどうしたらいいのだろうか。少なくとも膚の闇をかい間でも逃げないことを一あの僧の像のようにはー、そしてまたその鬼の力に自分のエネルギーを吸いとらわれないことーあの鉄輪の女は、鬼と化してなお愛し続けている己れの弱い女の後姿は、鬼と化してなお愛し続けている。

彼女は、「そんなどぐらいで負けるものかと感じないふりをし、感じないように、ついに感じられないくなつた」(28回)と言っている。しかしそれは傷つかなくなつたわけではない。闇にかくされた死骸はおそらく度は彼女も気づかぬうちにさらに重ねられていたのではないだろうか。

さすがに彼女の闇は憎の嗜好心によって露わにされたが、彼女の體血の闇—憎惡怒りの内面—は彼女の「意に反して口から出てしまう」ことにみられる。「自分は漠然としか考えていないのに、気付くとそれをブツツと言っている」(28回)「そしてみんなが自分の心中を知っている」(28回)。彼女は闇の戸戸を閉めておくだけの強さも持たないのである。彼女がいかに無感覺を装おうとしても、他人は彼女の闇の中をかいま見てしまうのである。彼女は黒嫁の女主よりもさらに鬼と化しかねない紙一重のところを生きているようにならなかつたのだ。しかしそれらの死骸は彼女の意に反して、直接受けられることを絶たねばならぬ危険を含んでいるといふことが言いたかったためである。こう考えると、先に彼女が自分の憎惡を外界に投射して、それがために周囲の人中の鬼を容易に見出さずにはおれなかつたことを述べたが、これこそ、彼女が人界との交わりを絶つまいとしている証拠ではないだろうか。(そしてまたこれを防衛機制といわれるものの主たる役割であるといえるだろう) 敏感に自分の内面を小説に表現したあとももちろんそれは意識されではおらず、彼女はそれをつくりもじる小説のだと主張するが—彼女は友達がないこと

を無性に寂しがりはじめた。「人が笑っていてもなぜか悔んだ。「このカーテンのむこうから通り抜けてくる光が描きたいた」(13、14回)「旭をあびた鳥が描きたい」(16回)「空のむこうに光があるような、心のような友達がない。心をうちあけて話せるような、心

を話してくれるような友達がない。今までそんな友達がほんとうとも満足していなかったけど…」(21回) 彼女はそれまで忘れていた人間と人間のコミュニケーション・人界の交わりに次第に心を向けてきたのである。そしてそれと平行して、そう思ってもなお人界の交わりを守らない自分に、自分の内にこそ鬼があるのではないかと氣づいてゆくのである。それは彼女の苦しみを倍加させる。「私には感情がないみたい、そんな私に誰が感情を話してなどくれるものか。私は人より優れていると思いたい。だから自分が壓迫されるとパッと気がつくの。」(21回)「時々、何の理由もなくおなかの底から怒りがボコッボコッとふき出してくれるの」(23回)「人が真剣でないのを、ぱっと、すぐに悪口やののしりが口から出そうになるの。人を傷つけることばが口からとび出しそう」(25回)

自分が鬼界に住む者なのではないかと感じることが、なおさら彼女を人界に執着させるのである。その間で彼女は擺れ動いている。自分の内にこそ鬼がいるのだろうことを認める彼女を受け容れ、しかもなお彼女を鬼界へ押しやらないために、治療者はいったいどうしたらいいのだろうか。少なくとも膚の闇をかい間でも逃げないことを一あの僧の像のようにはー、そしてまたその鬼の力に自分のエネルギーを吸いとらわれないことーあの鉄輪の女は、鬼と化してなお愛し続けている己れの弱い女の後姿は、鬼と化してなお愛し続けている。

彼女は、「そんなどぐらいで負けるものかと感じないふりをし、感じないように、ついに感じられないくなつた」(28回)と言っている。しかしそれは傷つかなくなつたわけではない。闇にかくされた死骸はおそらく度は彼女も気づかぬうちにさらに重ねられていたのではないだろうか。

さすがに彼女の闇は憎の嗜好心によって露わにされたが、彼女の體血の闇—憎惡怒りの内面—は彼女の「意に反して口から出てしまう」ことにみられる。「自分は漠然としか考えていないのに、気付くとそれをブツツと言っている」(28回)「そしてみんなが自分の心中を知っている」(28回)。彼女は闇の戸戸を閉めておくだけの強さも持たないのである。彼女がいかに無感覺を装おうとしても、他人は彼女の闇の中をかいま見てしまうのである。彼女は黒嫁の女主よりもさらに鬼と化しかねない紙一重のところを生きているようにならなかつたのだ。しかしそれらの死骸は彼女の意に反して、直接受けられることを絶たねばならぬ危険を含んでいるといふことが言いたかったためである。こう考えると、先に彼女が自分の憎惡を外界に投射して、それがために周囲の人中の鬼を容易に見出さずにはおれなかつたことを述べたが、これこそ、彼女が人界との交わりを絶つまいとしている証拠ではないだろうか。(そしてまたこれを防衛機制といわれるものの主たる役割であるといえるだろう) 敏感に自分の内面を小説に表現したあともじる小説のだと主張するが—彼女は友達がないこと

のまわりには光があるでしょ。それなのにこの絵はこの空の色をとったら何もかも満足していなかったんだけど…」(21回) 彼女はその理由を用いて色で光を言つたのだろう。それは絵の具を用いて色で光を描くというテクニックを超えたイメージのように思えた。ある絵画展で治療者は「光」がどのように思っているものか、そのイメージを追つてみたが、どれも彼女が求めているものとは合致しないようになつた。何百という作品の中で光をテーマとしたものの多くは、夕暮れ・月の光・光と影の強烈な対比を描いたものであつて、画面全体に光が満ちあふれているといつたイメージはついに得られなかった。そして治療者ははそのような画面一杯にあふれる光のイメージこそ、彼女が求めている“光”ではないかと思えるのである。

しかし絵画における光の表現は、限られた光にこそその特徴をきわだせているようにも思われる。光の描き方にその名をつけられたレンブラントの描く光とは、ほとんどを覆う影の面にわずかに当つた光のことであり、美しい太陽光線を描きあげたターナーも、周囲のタマの中の残光にその技術を完成させている。そして彼らの作品は、だからこそその対象の形、すなわちその対象と背景の境界(boundary)をはっきりと描き出しているのである。

それに比較して画面全体に光が満ちあふれたような作品はどうであろうか。ピンセント・V・ゴッホを例にあげると、彼は描く点の1つ1つに光を含ませて、その画面全体を光がおおっているかのように描いた。すなわち、対象の色を示す点の1つ1つに光を伴わせて描くことで光をあびた情景を描こうとした。そしてそれらの作品は、レンブラントやターナーの作品では、少ない光に照されている対象の境界が明らかに見てとれるのに比べて、どこからが背景でどこからが対象なのか、それを明瞭かにすることは困難である。ゴッホの作品で、境界に強い黒線が用いられることが多いが、むしろそこまでの影響と見る見方も多いが、むしろそのようにまで境界そのものを描かねばならないのは、実体の不確実性、本来のboundaryのものさとも考えられるのではないだろうか。強烈な光のもどでは、対象は光に同化し、背景もまた光に同化することによってそれらは同じ要素をもつたものとして全く分ちがつたものになっている。光は背景にも対象にも自由に侵入し、それらを光と化し、光と一緒に化し、実体を融かし去つてしまうのである。それは、影があつてはじめてとらえられるような光とは全く異質の、強力なエネルギーそのものを内在した“光”なのである。そして内面の虚ろな闇に見合うのは、一筋の光線でもわざかに見えるうす明りでもないこいついう“光”なのでは

II. 光 の 章

——光のイメージを追つて……

さて、鬼の章では主に彼女によつて語られたことばを中心にして語ってきた。そしてここまで、能の女のイメージと彼女の示すイメージをからみあわせてきた。その中で治療者自身の課題もいくつかひろいあがれたが、これが人界との交わりを絶つまいとしている証拠ではないだろうか。(そしてまたこれを防衛機制といわれるものの主たる役割であるといえるだろう) 敏感に自分の内面を小説に表現したあともじる小説のだと主張するが—彼女は友達がないこと

を無性に寂しがりはじめた。「人が笑っていてもなぜか悔んだ。「このカーテンのむこうから通り抜けてくる光が描きたいた」(13、14回)「旭をあびた鳥が描きたい」(16回)「空のむこうに光があるような、心のような友達がない。心をうちあけて話せるような、心

ないだろうか。“一筋の光”や“うす明り”が光として対象をうかびだすことができるのには、その対象自体が明確な形をもった実体である。そうでないなら、つまり虚ろな闇しかそこにはないなら、光はそれ自身エネルギーをもって周囲を同化し、光そのものの存在を示し、その「光」という字はまことに言い得て妙である)である。この光に包まれた一瞬のイメージは恍惚感とともに非常に恐怖である。背骨を竦めらるような恐怖感・不安感を伴うものである。この貝の中のイメージはさらに強烈な“光”でなくてはならないのである。また分裂病者の描く絵には太陽がよく描かれるといわれるが、太陽が何らかの形をとつて描かれているうちはまだ何らかの防衛が働いており、太陽に示される“光”エネルギーを限定しようとする動きが保たれていると考えてよいのではないか。それがさらには光を描くことを求めつづけると、その光はついには太陽の形を崩壊させ、そこから無限に放射された光のエネルギーは対象にまで侵透し、対象の境界(boundary)をも崩壊してゆくのである。ここに至ると描く者の自我の境界(boundary)もまた崩壊の危機に陥しているといえる。というのは、光そのものをそこまで執拗に描こうとすること自体、そのような原始的イメージへの退行を自我に強いことだからである。彼女がついにその光を求めて描いたのは、ことと止めたりある光にして描いたのは、仕方のないことであると同時に彼女の自我の健在さの部分を示しているようにも思われる。

この“光”は意識的に外界の認知として体験されるものではなく、意識的にいかに強い光を思い浮べたところで、この光にはとうてい及ばないと思われる。治療者がこう思うに至ったのは、訓練の一部として行なっている指導覚醒夢法(R・ドスワイユ)での体験を通してであった。その回は下降のイメージをたどつていたのであるが、地の底から海の底に降り、海底で、2、3のできごとに遭遇したあと…「私はそこからさらにとびおり、先に進んでゆきます。岩のむこうの右手の方に何か明るいところが見えます。行ってみると白い大きな貝が口を開けていて、その中からまばゆいといいう以上の強い白光が出てゆきます。貝の奥の光が出ている六の中におりてゆくと、なんだか光で息苦しくなります。そして自分の体が光に同化してしまいます。私は体を丸めて柔い光に包まられて、まるで真珠の核になつたようになり光の物質に包まれているようです。丸く小さくなると体がスッと傾き、それと同時にスープと光で滑りおちてゆきます。…」この光の粘膜にくるみこまれた自分は手足が光と同化し、消え去ってゆき、体までもどんどん光と化して融合していくといった極めて危険なイメージの中に滑りおちていったのである。幸いにしてかろうじてひき戻され得た鬼は単に罪人でしかない。現世の秩序によって容易に扶殺される。また全く光の世界でエネルギーを感じたので現在こうして書いていられるのだが、一歩まちが

て平行を保っているだけの鬼はもはや鬼ではない。鬼と同じさせるものがそこには存在しないのであるから…。光のエネルギーを背景にしつつ鬼が現世に登場した時、鬼は現世の無意識を直接震動させるようなエネルギーを発散しつつまさに“鬼”となる。鬼がエネルギーをもつているものが、人界にとつては鬼の體の闇としか思えない。それは鬼の章で述べた通りである。それを人界に対して、人界がうけ入れられる形に変えて示すことができてはじめて鬼は人界に立ち戻ることができるのである。しかしそれは、想像を絶する程の労力と時間、そして恐怖との闘いを必要とするものもある。治療者としては必ずしも彼女と共にできたらと念じている。

最後に、様々なイメージの上を浮遊しながら述べてきたが、どれだけのイメージを伝えることができたか、いささか不安である。ただ、いつか體の闇や強烈な光のイメージなどをクライエントあるいは自分自身のイメージの中に発見した時、いくらかでもこれまで述べてきたことを思い出していただけたら幸いに思う。

本稿は治療経過から離れて記述してきたが、本事例の治療経過については別の機会に論じたい。

藤繩論文に対するコメント

- 参考文献
- ・馬場あき子 1976 鬼の研究 角川文庫
 - ・ドスワイユ, R. 1945 心理療法における指導覚醒夢法についての概観 「空と夢」(G. バシュラール) 第4章, ロベル・ドスワイユの業績 法政大学出版局
 - ・Guntrip, H. 1974 Schizoid Phenomena, Object-relations and the Self The Hogarth Press, London
 - ・近藤喜博 1975 日本の鬼 桜風社
 - ・ミンコフスキー, E. 村上仁訳 1954 精神分裂病みすず書房
 - ・織田尚生 1976 分裂病患者にたいする描画を媒介とした精神療法的接近 ——いわゆる「太陽表現期」の意義について—— 善術療法 Vol. 7, 17-24
 - ・ペソコフ, G. 三好暉光訳 1970 身体像の回復 岩崎学術出版社
 - ・鶴田良仁 1976 ヴィンセント・ファン・ゴッホ現代のエスプリ—105— 絵画と精神病理 至文堂
 - ・日本古典文学大系 40, 41 謡曲集 1960 岩波書店

むすび

最初から彼女の住んでいる世界は、治療者のいる世界とそもそもちがっているのではないかという奇異な感じに治療者はおそれた。そんな治療者は彼女に会つてゆく中で、治療者が意識しているといいとにかく、それは治療者であるためにといふより、1個人の人間として通らねばならぬ道であったようと思われる。

結びとして、この光の世界と鬼の世界がどのように結びついたものであるかを探つてみたい。

治療者自身の体験からいふと、光の世界に行くには鬼の夢、不安、強迫觀念などは私ひとりのものではない。それは先祖代々からうけつがれた遺産であり、古代からその財産であり共有物である。J. ジョネスも私ひとりが世界のうちにいるのではなく、われわれひとひとりが、その存在の根底に於て、自分自身であるばかりでなく、同時にすべての他者である。したがつて、多くの作業をせざるを得なかつた。それは治療者であるためにといふより、1個人の人間として通らねばならぬ道であったようと思われる。

この論文を一読して以上の人々の文章が脳裡にうかんできた。やや冗漫になるかも知れないが、あえてここで引用した。クライエントの生きざまを理解するために、彼を連れこれのイメージでつつみ、少しでも彼をとりまく世界を運んねばならない。そして現実の世界には鬼の世界を経なければならぬ。しかし、鬼の世界以上に強烈なエネルギーをもつた恐怖である。しかし、鬼の世界にとつて光の世界は決して恐怖ではない。恐怖は鬼が光の世界についてくるものである。言いかえると、鬼が現実の世界と光の世界の両方にまたがった橋をかけようとした時、強烈な不安におそれるのである。全く現世に入りこんでいるがために、クライエントにとっては気のきいた、治療者にとっては氣にいったイメージ(バシュラールのいらいマジネール)こそ必要である。ただ治療者の内面

臍血の闇) が人間の形相をつきくずさんばかりに動めている。そのために治療者はクライエントに鬼を感じたのである。しかも、それは白い鬼ではなくたのであるうか？したがって、鬼としては怨みの朱鬼(鉄輪の女)とか、いかりの心だけがさめやらずに炎えつづける紺青の鬼でもない。

2) 白鬼は黒塚の鬼に似てうごきは少ないが(教化の僧に追討ちをかけない)一方、上述の鬼のように愛憎の強烈な両面性を示す動的などろがなく、もとと静的であり、自閉的ですらある。しかも、刺しても血の出ない(キリスト像=自己像)冷たさがあり、いくら輸血しても健房に終るような不毛性を宿しているかのようである(男は解らないでくさっていく)。それだけ無氣味(unheimlich)である(人間のふるさと(Heimat)から静かにはうり出され Heimat にいない)。著者がクライエントに接しい知れぬ虚空感を感じたのも無理もないのではないか。

3) 分裂病の急性期(狂気)をすぎたクライエントの生きざまには、狂気は退りぞき、鬼気のせまるのを感じるのも当然かも知れぬ。しかし、過ぎ去った狂気をクライエントはどうの生き、どのようなあり方(Seinsweise)を示しているのか、マイヤー・グロースにならつて次のようにその様態が分けられよう。(1)深く絶望の深渊に落ちこんで光のさしまない虚無的実存(2)治療者の了解のかなたに新しい生活が始まる(3)何も起らなかつたように生きているが、病状としては雖人症や強迫症等がみられる(4)啓示によって了解可能な生活が展開している(5)狂気と鬼気とがとけあって日常性を逸脱した魅力的な実存となつている。著者はこの論文では、クライエントの治療経過について別に述べるといつているが、おそらくはクライエントの生きざまは(1)と(3)の間を動搖しているのではないだろうか。そこに何も欲していないと同時にもっと光をと望んでいる痛ましい生きざまがある。したがって、治療者の了解をこえてもいから(2)の生き方を示してほしいといふところに、治療者の治療意欲がそそられるのであろう。

4) 狂気より鬼(修羅等)がおどり出て人間界にかえつていくのにば僧が根本的な役割を果たす。僧はサンス

クリットで San といわれ、共存在(Mitsein)と訳される。地上の鬼と天上の光を媒介するのも、文字通り僧であるゆえ、治療者も根本的には San の一様態である。ここで、はじめに引用した J. ジョネスコの言葉を思い出してほしい。黒塚の鬼の臍血の闇も人間の遺産であり共有物である。白い鬼にもそれにふさわしい光の僧が照応しているのであって著者もそれに気づいている。すなわち白いクライエント(身体)に照り返されないように、また身体の境界をくずさないようにして、彼女をあたためつ光をあてていかねばならない。

5) 治療者は指導覚醒夢を経験し、光そのものの中につつみこまれ恍惚となつた体験をしたとのことである。それは自我境界が崩壊に頻する程の危険なイメージの旅をしたことになり、一大冒險であった。一方クライエントもその夢想物語の中で“…2人になって冒險をつづける”と述べている。すなわちクライエントの冒險を治療者が先取りして実行したことになっているが、このことがクライエントの共存在に影響をあたえない筈はない。

クライエントと共にする旅は暗黒の死のなか、あるいは地獄界も通つてかねばならないであろう。過去に積み重ねられた臍血の闇をくぐりぬけて、未来からの光を共に受けねばならないのは当然である。しかし、治療者が冒險にはやつて光に酔いすぎるすれば、それは少し気にかかることにならう。

ここまで思いつくまでに箇条書きにかいてやや散漫になつたきらいがあるのでこの位で筆をおここう。

この論文を読みつつ、私も数多くの分裂病者と共に生生活しながら、ほんとうに彼等の世界をつかんだかどうか(Begriff でつかむ(begreifen))と自問自答する。最近パリーで客死した森有正の言葉をもつてすれば、「私より遙か以前より存在し、他の人々によつても使用された言葉」の中に分裂病の世界がすっかり入つたか？ すなわち分裂病の世界が私の「経験」となつたかということであった。ここでイメージの力で彼等の世界を追体験できたように思つても、それは却つてその世界をほんとうに知る(経験)ことの妨げになることさえあることも同時に知つておく必要がある。